

バイリンガル子育ての ヒント

vol.3

『子供は親の鏡』



ビッグマリオン効果というのをご存じでしょうか？教師の期待によって学習者の成績が向上するという教育心理学用語です。アメリカで暮らす場合は、親である皆さんが子供にとって第1の日本語教師です。皆さんがお子さんにどんな日本語力を期待するかが、お子さんの実際の日本語力にも影響を与えます。

子供は親をしつかり見えています。親の心の迷いも見透かしています。「この子は日本語が話せるようになるのだろうか？」「こんなに日本語を勉強させる必要があるのだろうか？」「今子供に日本語を話すと周りの人に対して失礼にならないだろうか？」この様な親の迷いは、言葉にしなくても子供にはしっかりと伝わっています。

先生に自分の能力を信用されていないと感じれば、生徒は努力しなくなります。先生が自分が教えることに信念を持っていなければ、生徒も学ぶ気力を失います。先生が日本語を話すことをためらえば、生徒は「英語の方がいいのかも。」と受け取ります。つまり生徒である子供は先生である親の鏡なのです。

バイリンガル教育の方法の一つにOPOL (One Person One Language) があります。高度な日本語教育を目指すなら、教師である親が子供とにかく一貫して日本語を話すこの方法を強くお勧めします。「時々」や、「ほぼいつも」ではためなのです。たとえ英語のスピーカーに囲まれていても「100%一貫して」話すのです。確かに困る

こともありませんが、その場合の対処法は別の機会にお話します。親が英語に切り替えてしまうと、子供に「英語を話してもいいんだよ。」というメッセージを送ることになり、一気に日本語学習意欲が低下してしまいます。

3つ子の魂百までと言いますが、3才になる頃までに「私とあなたは何かあっても一生日本語で話すのよ。」という絆を子供と確立しておく、その後のバイリンガル子育てがスムーズに行きます。親である皆さんがこの子は絶対日本語が話せるようになることと信じて、バイリンガルに育てることの意義を確信していること。この様な親の毅然とした態度は、必ず子供にも伝わり、日本語教育に大変良い効果をもたらします。

宮崎 直子

津田塾大学英文科卒、イリノイ大学アジア研究科(日本語教育、言語学専攻)修士課程卒。ことばナカルチャー (kotobaandculture.com) 代表。

